

調査研究報告書 サマリー

平成30年度子ども・子育て支援推進調査研究事業

低出生体重による成人期生活習慣病を含めた疾病負担に関する研究
国立研究開発法人 国立成育医療研究センター

低出生体重は出生後から新生児期の短期予後のみならず、成人期の生活習慣病やメンタルヘルス、癌などのリスクが上昇することが疫学的に証明されており、今後の日本の疾病構造の中で低出生体重がどの程度リスクとなってくるのかは現在のところはっきりしていない。そこで、本研究では低出生体重となるリスク因子、成人期までの健康課題とそのリスクの大きさ、それがどの程度日本の疾病負担に寄与するか、低出生体重を予防するのにどのような介入がされてきたか、日本のコホート研究を通して日本人の低出生体重のアウトカムの評価の試み、の5つの観点から日本の低出生体重の現状を明らかにすることを目的とした。

低出生体重のリスク因子に関するオーバービューレビューでは、産科合併症を除いて抽出してきたところ、母の社会経済的地位やそれに関連する因子が多いことが判明した。貧困地域に居住すること、シングルマザー、若年妊娠、家庭内暴力、喫煙、妊娠と妊娠との期間が短いことなど多岐に渡っていた。生殖補助医療や妊娠中の体重増加が少ないことも重要な因子と考えられた。

低出生体重の長期予後に関するオーバービューレビューでは、高血圧や2型糖尿病などが挙げられており、さらに腎機能障害や冠動脈心疾患などが有意差を持ってリスクが上がると解析されていた。また、メンタルヘルスの分野では自閉症、うつや知的障害が挙げられており、低出生体重の児のメンタルヘルスのフォローも重要であると考えられた。

低出生体重の長期的な疾病負担の推計では、長期予後のオーバービューレビューで抽出されたオッズ比を用いて、世界の疾病負担研究で用いられる指標のDALYsで成人期までの疾病負担を推計した。冠動脈心疾患、2型糖尿病、腎機能障害の3疾患でこれまでに世界の疾病負担研究で推計されていた低出生体重（早産含む）の短期予後のDALYsの7割の大きさのDALYsが疾病負担として推計され、低出生体重のインパクトはそれなりに考慮すべきものと考えられた。

低出生体重の予防介入についてのコクランの系統的レビューのオーバービューレビューでは、下部生殖器感染症のスクリーニングが効果ありとされていた。早産に関する予防介入の有効性が示唆されていたが、一般の妊婦に対するものは鉄分の補充以外のはっきり有効性が示されたものはなかった。今回抽出されてきた社会的なリスク因子に関する検討は認められず、妊婦への包括的な支援などは今後の課題と考えられた。

日本の低出生体重の長期的な影響を推定するためのコホート事業の連携に関しては、連携することでビッグデータによる日本での低出生体重のアウトカムに関するエビデンスが出てくることが期待される。